

北海道における縄文世界遺産の活用のあり方

未来へつづく、一万年ストーリー。

令和3年3月

北海道

第1章 策定の趣旨と位置づけ

1 策定の趣旨	1
2 あり方の位置づけ	
3 ことばの定義と活用の対象範囲	2

第2章 資産の概要と道内構成資産

1 世界遺産としての価値	3
2 道内構成資産	4

第3章 北海道における縄文世界遺産の現状と課題

1 国内外の動向及び現状	6
2 北海道の優位性	9
3 北海道が抱える課題	10
4 北の縄文に関するアンケート結果（概要）	11
5 まとめ	13

第4章 北海道がめざすもの

1 将来像	14
2 キャッチフレーズ	15
3 各主体の役割と基本的な姿勢	17

第5章 戦略と施策の展開

1 戦略の視点	18
2 戦略の進め方	
3 施策の展開	19
4 工程	26

第6章 将来像の実現に向けて

1 各主体の連携と推進体制のあり方	27
2 中核となる人材のあり方	
3 持続可能な運営のあり方	

第1章 策定の趣旨と位置づけ

1 策定の趣旨

北海道では、平成19年の「北海道・北東北知事サミット」における共同提案への合意に基づき、青森県、岩手県、秋田県及び関係市町をはじめ、民間団体や地域の人々とともに「北海道・北東北の縄文遺跡群（以下、「縄文遺跡群」という。）」の世界遺産登録に向けた取組を進めてきました。

令和元（2019）年12月、これまでの取組が実を結び政府による推薦が決定し、令和2（2020）年1月、ユネスコ（国連教育科学文化機関）に推薦書が提出されたところです。

その後、ユネスコの諮問機関であるイコモス（国際記念物遺跡会議）による審査が行われていますが、引き続き、北東北3県及び関係市町と連携し、北海道初の世界文化遺産登録実現に向かって全力で取り組んでいます。

世界遺産登録後は、道民の地元に対する誇りや愛着が一層深まるとともに、国内外からの来訪者の増加が想定されます。この機会を確実に捉え、北東北3県とさらなる連携を図ることはもちろんのこと、世界遺産登録の効果を地域の賑わいの創出に繋げていくため、行政、地域住民、民間事業者等の各主体が相互に連携して取組を進めることが重要となります。

このため、北海道における縄文世界遺産がめざすべき地域の賑わいとは何か、また、北海道全体にどのように波及させるのか、その将来像を描くとともに、各主体が一体となって将来像の実現に向けた取組を進めるための方向性を示すものとして「北海道における縄文世界遺産の活用のあり方」（以下、「あり方」という。）を策定します。

2 あり方の位置づけ

「あり方」は、構成資産全体の保存・管理及び整備に関する方針を示す「北海道・北東北の縄文遺跡群包括的保存管理計画¹」及び施策の方向性、取組内容等を示す「保存活用推進行動計画¹」を踏まえた事業を推進するため、北海道内に所在する構成資産の一体的な活用を進めるための方向性を示すものであり、上記管理計画及び行動計画との整合性を図るとともに、道内構成資産所在市町が策定した「保存活用計画」とも整合性を図ります。

また、本「あり方」は、北海道として今後の活用に向けた取組の方向性を示すものでもあることから、北海道総合計画や北海道創生総合戦略のほか、北海道環境基本計画及び北海道観光のくにづくり行動計画など北海道の各種計画との整合性を図ることとします。

なお、本「あり方」は、かけがえのない地球環境を守り、多様性と包摂性のある社会

¹ 2019（令和元）年「縄文遺跡群世界遺産登録推進本部」策定。

の実現に向けて国連で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）²」に関する主に以下のゴールについて、後述する「北海道の縄文」の価値が様々な取組に浸透していくことを通して、その推進に資するものです。

- ・ゴール11（住み続けられるまちづくりを）



3 ことばの定義と活用の対象範囲

本「あり方」で用いる「縄文世界遺産」とは、世界遺産登録をめざす「北海道・北東北の縄文遺跡群」のうち、北海道内の6つの構成資産と1つの関連資産を指します。また、「縄文世界遺産」を含む北海道全域に存在する縄文遺跡・文化を総称して「北海道の縄文」と呼ぶこととします。

本「あり方」の中で活用を図る範囲は、「縄文世界遺産」が中心となりますが、世界遺産登録による縄文文化への注目の高まりを、将来的に道内全域に波及させていく必要があることから、「北海道の縄文」全体の活用が図れるよう配慮します。

² 2015年9月に国連サミットで採択された、2030年を期限とする先進国を含む国際社会全体の開発目標であり、17のゴール（目標）と、それぞれの下により具体的な169のターゲットがある。全ての関係者（先進国、途上国、民間企業、NGO、有識者等）の役割を重視し、「誰一人取り残さない」社会の実現を目指して、経済・社会・環境をめぐる広範囲な課題に統合的に取り組むもの。

第2章 資産の概要と道内構成資産

1 世界遺産としての価値

日本列島に広く展開した縄文文化は、一万年以上の長きにわたり農耕文化に移行することなく、気候の変動に伴う環境変化に巧みに適応しながら、狩猟・漁労・採集を中心として安定した生活を営むとともに、土偶や環状列石などに見られるように、高い精神文化を構築した世界的にも極めて稀な先史文化です。

「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、日本列島の中でも北海道南部と北東北の地理的・自然的環境を背景に、縄文時代の始まりから終わりまで一貫して縄文文化が栄え、その遺跡が良好に現在まで保存されてきた17の遺跡で構成されており、「縄文一万年の歴史を一つの自然環境のもとで語る事ができる」ものとして、世界遺産に推薦されています。



図1 北海道・北東北の縄文遺跡群の遺跡位置

³ 文化財保護法上、遺跡のうち重要なものは「史跡」に指定され、そのうち「学術上の価値が特に高く、我が国文化の象徴たるもの」が「特別史跡」に指定されます。史跡は全国で1,823件あり、そのうち62件が特別史跡に指定されています(2019(令和元)年6月時点)。

2 道内構成資産

北海道・北東北の縄文遺跡群のうち、北海道内には6つの構成資産と1つの関連資産があります。それぞれの概要を紹介します。

(1) 構成資産

①垣ノ島遺跡（函館市） 【BCE7,000～1,000年頃】

居住域と墓域が分離した頃の集落で、墓には大型の合葬墓と通常の単独墓があります。墓からは幼児の足形を押し付けた粘土板が副葬されている例があるなど、当時の葬送や精神性が分かる遺跡です。その後、約4000年前になると長さ190mを越える盛土遺構（土器や石器等の送り場）がつけられます。



図2 足形付土板

②北黄金貝塚（伊達市） 【BCE5,000～3,500年頃】

温暖期の貝塚を伴う集落で、貝塚からは気候変動に準じた魚類や貝類が堆積するほか、ヒトの墓もつくられています。また貝塚の低地には湧き水が流れ、すり石や石皿などの石器が大量に廃棄されており、廃棄に伴う祭祀が行われていたと考えられています。



図3 復元された貝塚

③大船遺跡（函館市） 【BCE3,500～2,000年頃】

大型の住居を伴う拠点集落で、深さ2mを越える竪穴住居や食料の貯蔵穴が密集しています。またクジラ、マグロ、オットセイなどの海洋資源のほか、クリなどの森林資源やヒエの種子も出土しており、当時の生活基盤や集落の様子がわかります。



図4 大船遺跡全景

④入江貝塚（洞爺湖町） 【BCE2,000年頃】

貝塚を伴う集落で、墓域からは幼い頃にポリオに罹り、成人を過ぎるまで生きていたことが分かる人骨が見つかっており、集落内で手厚い介護を受けながら生き長らえることができた様子が伝わってきます。



図5 ポリオに罹患した人骨

⑤キウス周堤墓群（千歳市） 【BCE1,200年頃】

周堤を伴う大規模な集団墓地で、円形の竪穴を掘ってその外側に周堤を造り、内側に複数の墓を配置しています。最大のもは直径 80m、周堤上面までの高さが 4m を越えるものもあります。北海道独特の墓制で、当時の社会構造のあり方が読み取れます。



図6 周堤墓全景

⑥高砂貝塚（洞爺湖町） 【BCE1,000年頃】

貝塚を伴う集団墓地で、土偶や土製品など精神活動に伴う遺物が出土しています。

また、貝塚からはアサリやカレイが多く見られ、この時期が一時的に寒冷化していたことがわかるほか、鹿角製の銚頭も発見されており活発な漁労が行われていたことが伺えます。



図7 土偶と土製品

(2) 関連資産

■鷺ノ木遺跡（森町） 【BCE2,000年頃】

北海道最大級の環状列石で、大型の礫を三重に配置し直径は約 37m もあります。隣接して竪穴墓域が確認されており、当時の社会や縄文人の精神世界を知ることができます。なお、この環状列石は高速道路の建設中に発見され、保存のためにトンネルを手作業で掘るなど現状維持に最善が尽くされました。



図8 鷺ノ木遺跡全景

縄文時代（時期区分）					
草創期	早期	前期	中期	後期	晩期
	垣ノ島遺跡				
		北黄金貝塚			
		大船遺跡			
				入江貝塚	
				キウス周堤墓群	
					高砂貝塚

図9 縄文時代の区分及び各遺跡の年代

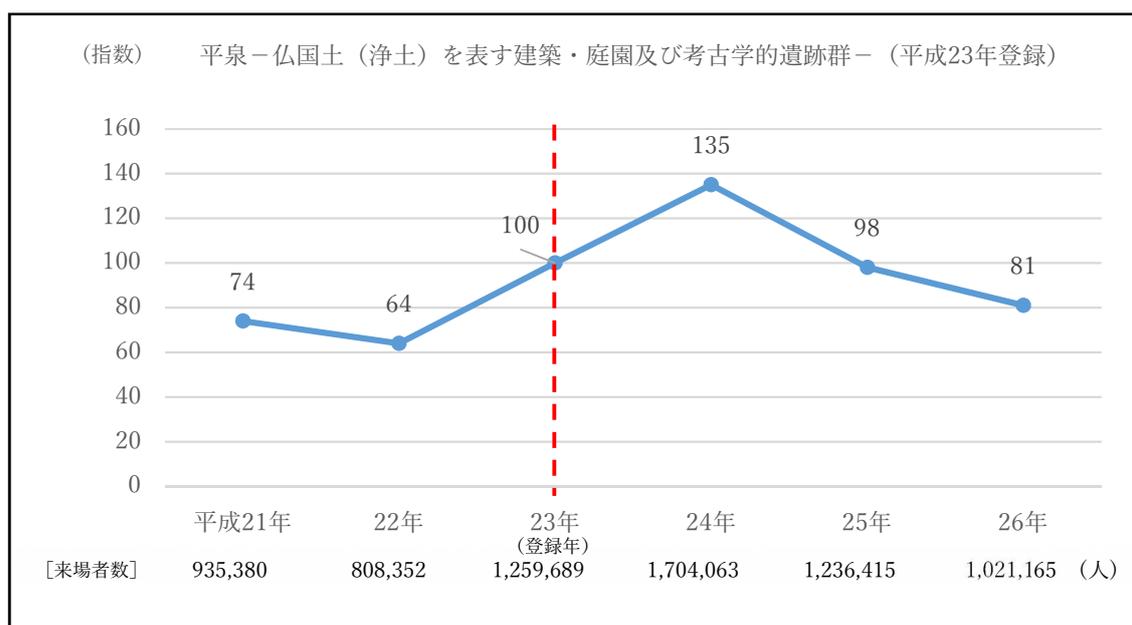
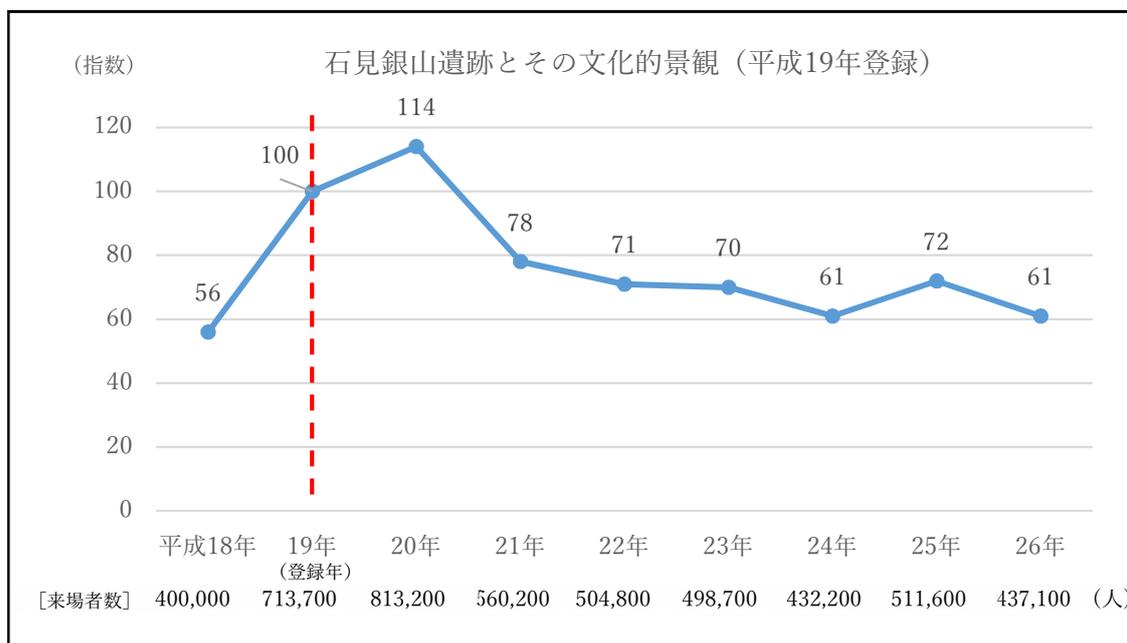
第3章 北海道における縄文世界遺産の現状と課題

1 国内外の動向及び現状

(1) 国内の世界遺産の来訪者の動向

日本国内には2020（令和2）年4月時点で、23件の世界遺産（文化遺産19件、自然遺産4件）が登録されています。

登録後の来訪者の動向は、登録直後に大幅な来訪者の増加が見られる一方で、登録後数年で減少していく事例が見られます。



出典「世界文化遺産の保存・管理等に関する実態調査 結果報告書」（平成28年）総務省

図10 国内世界遺産の来訪者の動向

また、「北海道・北東北の縄文遺跡群」と同様のシリアルノミネーション（複数で構成する資産）では、認知度の高い特定の遺産に来訪者が集中する事例が見られます。

このほか、来訪者の増加が必ずしも地域にプラスの要因をもたらすだけではなく、その地域の許容量を超える来訪者が訪れることで、地域住民の生活環境の悪化や世界遺産の価値の棄損など、オーバーツーリズムが懸念される状況も見られます。

[富岡製糸場と絹産業遺産群（平成26年登録）]

所在地		資産名	登録前(H25年度)	登録後(H26年度)
群馬県	富岡市	富岡製糸場	314,516	1,337,720
	伊勢崎市	田島弥平旧宅	8,414	40,086
	藤岡市	高山社跡	11,895	53,958
	下仁田市	荒船風穴	5,517	23,123
合 計			340,342	1,454,887

出典：平成26年度「富岡製糸場と絹産業遺産群」年報

[長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連資産（平成30年登録）]

所在地	資産名	登録前(H29.7-H30.6)	登録後(H30.7-R1.6)
長崎県	大浦天主堂	400,869	505,773
	外海の出津集落（出津教会堂）	27,833	63,986
	外海の大野集落（大野教会堂）	4,582	18,346
	黒島の集落（黒島天主堂）	4,607	6,085
	平戸の聖地と集落（春日集落）	3,416	23,005
	原城跡	17,721	49,781
	久賀島の集落（旧五輪教会堂）	7,576	22,168
	江上集落（江上天主堂）	6,931	18,077
	頭ヶ島の集落（頭ヶ島天主堂）	36,336	47,361
	野崎島の集落跡（旧野首教会）	3,593	5,167
熊本県	天草の津崎集落（津崎教会堂）	91,554	177,016
合 計		605,018	936,765

出典：長崎県観光統計を編集

図11 国内シリアルノミネーションにおける来訪者の動向

(2) 国の文化政策の動向

近年、国の文化政策は「文化を観光に活かす」視点にシフトしており、2016（平成28）年に策定された「明日の日本を支える観光ビジョン」の中で、この考えが明確に示されました。

文化庁では、このビジョンで掲げられた「文化財の観光資源としての開花」を実現するため、地域の文化財など歴史的資源を中核とした観光拠点形成の推進を図ることとして、「文化財を中核とした観光拠点形成による経済活性化調査研究」を取りまとめました。この研究では、「これまで対立構造にあると捉えられてきた『文化財』と『観光』を、ともに『まちづくり』を目指すものとして有機的に結び付け、文化財の保存と活用の均衡を図りながら、文化財が地域社会・経済にまで深く貢献し、その成果が地域にも文化財にも適切に還元されるような、好循環の実現を目指す」という理念のもと、戦略・目標について成果が報告されています。

また、2018（平成30）年には、「文化財保護法」が改正され、文化財をまちづくりを活かしていくための体制づくりの整備など、地方文化財行政の推進力の強化を図ることとされました。さらに、2020（令和2）年5月には、「文化観光推進法」が施行され、文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進が打ち出されました。

(3) 海外からの関心

縄文文化に対する関心は、近年海外においても高まりを見せています。2009年に大英博物館で「The Power of Dogu」が開催され約7万人が来場したほか、2018年にはパリ日本文化館において「縄文—日本における美の誕生—」が開催され、大きな反響を呼びました。

(4) 国内の動向

縄文文化以外の動向としても、アイヌ文化の復興や発展の拠点となる国立施設ウポポイ（民族共生象徴空間）の開設（2020年）など、北海道の文化への注目の高まりが期待されます。

また、2021年には欧米を中心に愛好者が多いアドベンチャートラベル⁴の国際会議である「アドベンチャートラベル・ワールドサミット（ATWS）」の道内開催が内定するなど、欧米をはじめとして世界にPRする機会となることも期待されています。

一方で、新型コロナウイルス等の世界的な感染拡大は、人々の生活や経済活動に深刻な影響を与えており、今後の観光のあり方については影響を慎重に見極める必要があります。

(5) 旅行形態の変化

人々の価値観やライフスタイルの多様化により、旅行形態や情報収集にも変化が見

⁴ アドベンチャートラベルは、アクティビティ、自然、異文化体験の3要素のうち、2つ以上を含む旅行形態。

られます。これまでのツアー参加による「観光名所」を巡る団体旅行から、個人が自分で見たいものや体験したいものを事前にインターネットで情報収集し、旅行手段まで確保する個人旅行が増加しています。

(6) 縄文文化に関する裾野の拡大

これまで縄文文化に関心がある層は、三内丸山遺跡（青森県青森市）などの大規模な遺跡の発掘成果など歴史や文化に興味のある層に支えられてきました。近年は、こうした層以外にも裾野の広がりが見られ、縄文専門のフリーペーパーの発行や映画の公開、縄文文化とアートを組み合わせた展示の開催のほか、「土偶女子」という言葉が登場するなど、女性を中心とした幅広い層からの関心が高まっています。

2 北海道の優位性

(1) 北海道独自の歩み

北海道南部と北東北は、共通する自然環境などから、一万年にわたる縄文時代を通して同一の文化圏を構築してきました。これは「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産推薦の中核となる普遍的価値です。

一方で、北海道の独自性は縄文時代以降に現れます。縄文文化が終わりを迎えた後、本州が農耕社会へと移行し、弥生文化、古墳文化へと進むなか、北海道は縄文文化を引き継ぐ続縄文文化、擦文文化を経て、また、オホーツク文化からも影響を受け、アイヌ文化へと続く独自の歴史を歩みます。

(2) 身近に存在する縄文遺跡

北海道には、世界遺産をめざす6つの構成資産及び1つの関連資産以外にも、道内全域に非常に多くの縄文遺跡が遺されており、その数は7千箇所以上にのぼります。日本国内には、約9万の縄文遺跡が存在していますが、そのうち1割近くを占めるなど、圧倒的な遺跡数は北の大地を生きた先人の活動が窺える貴重な地域資源です。

今後、世界遺産登録を契機に、道内各地の縄文遺跡にも注目が高まることが期待され、北海道が誇る自然や食など他の地域資源と結びつけた活用を図る余地は大きいと言えます。

(3) 豊かな自然環境と多彩な観光資源

北海道には縄文文化を育んだ豊かな自然環境が今も大切に保全されています。世界自然遺産である知床や23に及ぶ自然公園をはじめ、本道は自然の宝庫です。この豊かな自然を活かし、現在ではスキーやスノーボードなどのウィンタースポーツのほか、カヌー、ラフティング、サイクリングなど多彩なアウトドア体験が観光資源として魅力となっています。

(4) 道内における縄文文化の保存と活用の動向

道内の縄文文化を支える地域の活動団体は、世界遺産登録をめざす構成資産が所在する市町をはじめ、道内全域で25団体を超えます。それぞれの団体は地元市町村教育委員会などと連携し、地元の遺跡の保護やガイド活動のほか、来訪者向けのイベントを実施しており、保存と活用の取組を支える重要な存在です。



図12 貝輪づくり体験

また、地域に密着した取組ではないものの、土偶などの縄文の造形をモチーフとしたクラフト作品の制作・販売をする個人の集まりが盛り上がりを見せるなど、文化財を守る視点からだけでなく、縄文文化を個人の視点から楽しむ動きも広がってきており、今後の活用の担い手のひとつとなることが期待されます。



図13 クラフト作品販売会

3 北海道が抱える課題

(1) 地域の活動団体の活力低下

前述の地域の活動団体は、地域の縄文文化を守り継承してだけでなく、今後の活用を進めるためにも不可欠な存在です。しかし、日本全体が抱える地域コミュニティの高齢化や人口の減少などの影響により、活動を継承していく担い手不足などの活力の低下が懸念されます。

(2) 統一的な情報発信の不足

北海道には国内でも屈指の数の遺跡があり、私たちの身近に縄文文化の遺跡が残っていることや、日本で最も長く縄文文化を継承し続け、本州とは異なる歴史を歩むという特徴がある一方、これらの情報が必ずしも道民や北海道を訪れる人々に十分に認知されているとは言えません。

また、地域で開催する縄文関連の講座やイベントなどについても、個別の市町村による情報発信が主体となっており、今後、「北海道の縄文」の周遊を促進していくための統一的な情報発信が不足しています。

(3) 遺跡へのアクセスの向上

縄文世界遺産を構成する遺跡までのアクセスは、自家用車やツアーバスなどの車での来訪が主体となります。このため、車でのアクセス向上のため、遺跡までの確実な誘導を図るサインの設置や駐車場の確保が必要です。

また、一部においてシャトルバス運行などの取組が進められていますが、車以外でのアクセス環境が十分に整っていません。

4 北の縄文に関するアンケート結果（概要）

「あり方」の検討にあたり道内外の人々に、活用に関するアンケート調査を実施しました。以下はその調査結果の抜粋です。

(1) 実施概要

調査期間：2020（令和2）年5月29日～7月31日

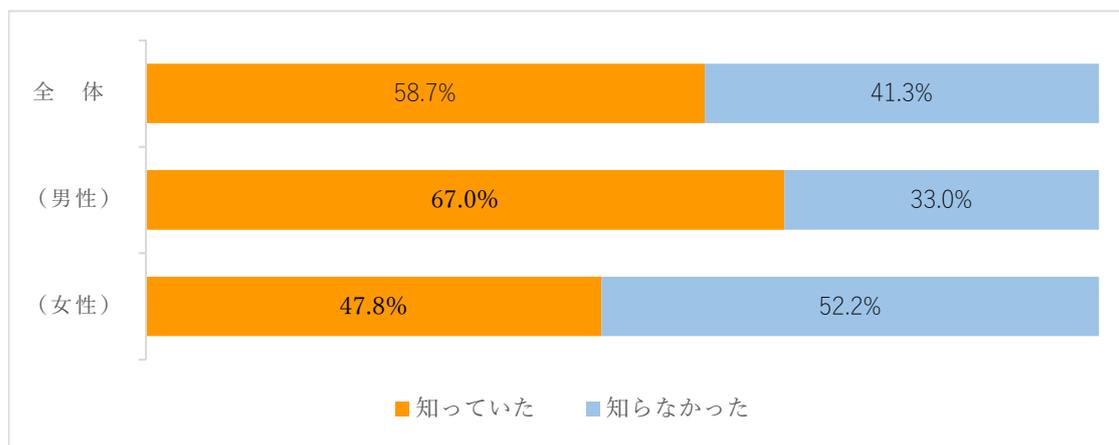
実施方法：インターネット上の専用フォームによる回答

告知方法：道ホームページや各種広報媒体のほか、関係市町広報誌等を通じて告知

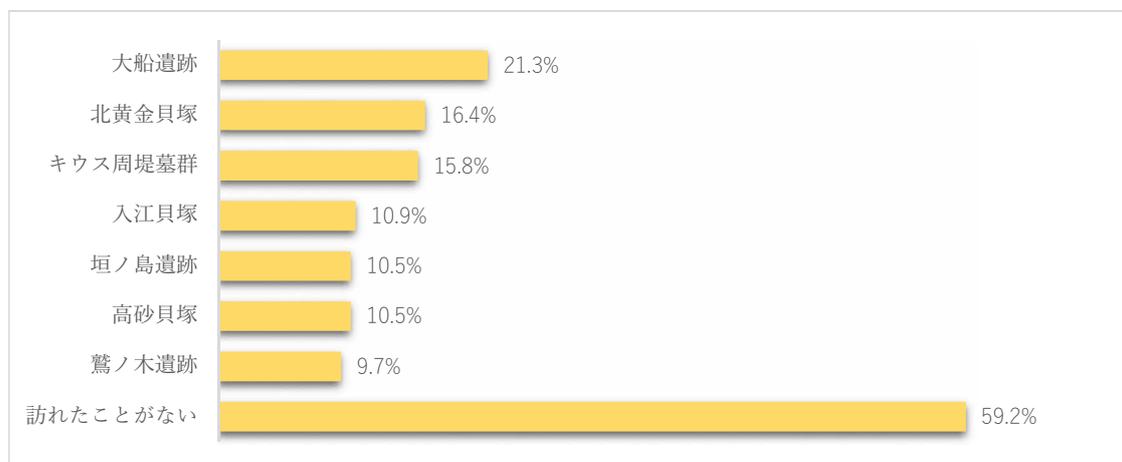
調査項目：世界遺産登録への取組、道内各遺跡への訪問、訪問理由、訪問者を増やす取組など

回答状況：全体 525（男性：291、女性：232、無回答：2）

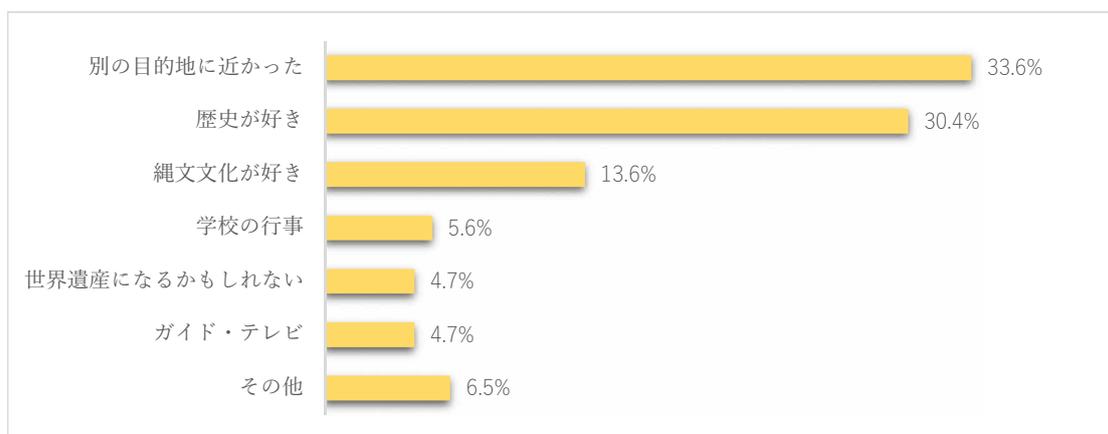
(2) 世界遺産登録の取組への認知度（回答数 525 人）



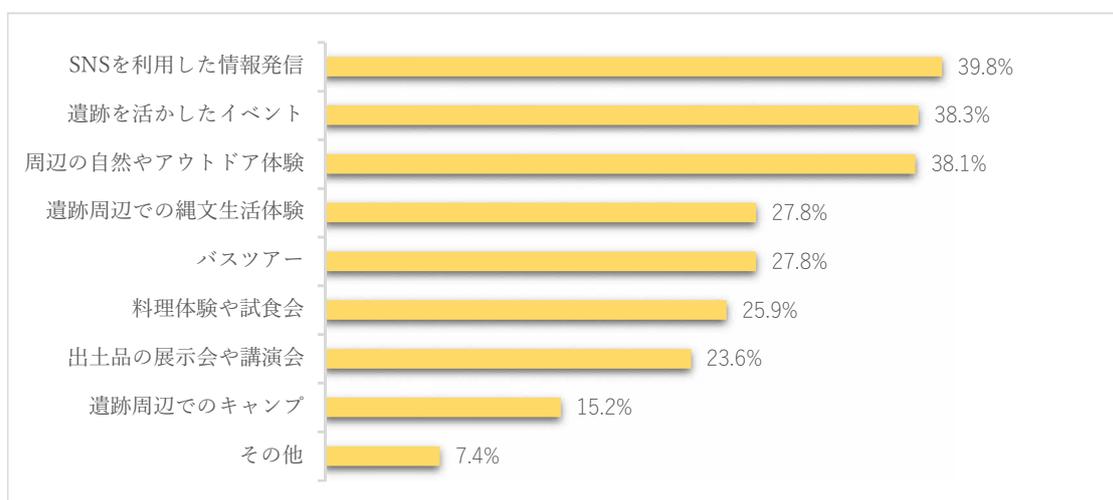
(3) 訪れたことのある遺跡（回答数 525 人）



(4) 遺跡を訪れた理由 (回答数 214 人)



(5) 活用していくための効果的な取組 (回答数 525 人)



(6) アンケート結果の概要

世界遺産登録の取組は 6 割近くの人々に認知されているという結果が得られた一方、遺跡を訪れたことがあるかという質問に対して約 6 割 (311 人) が「訪れたことがない」と回答し、さらに、遺跡を訪れたことがある人 (214 人) に、訪れたきっかけを尋ねたところ、「歴史が好き」と「縄文文化が好き」という遺跡を主目的とした来訪が全体の 4 割以上であった一方、「別の目的地に近かった」という理由が約 3 割にのぼることが分かりました。

これらのことから、世界遺産登録の取組への認知度は一定数あるものの、必ずしもそれが遺跡への来訪に結びついておらず、来訪を促す動機が弱いことが伺えます。

今後の活用に向けたニーズでは、「SNS を利用した情報発信」や「遺跡を活かしたイベント」、「周辺の自然やアウトドア体験」などの回答が高く、今後、遺跡及びその周辺の自然などを活かした縄文世界遺産ならではの「体験」の充実や、その情報の効果的な発信が必要と言えます。

5 まとめ

「北海道の縄文」を取り巻く現状は、縄文文化に対する国内外の関心の高まりや、国の文化政策が「文化を観光に活かす」視点にシフトしているなど、今後の活用に関して可能性を秘めていると言えます。

一方、世界遺産登録の取組への認知度が6割近くありながら、実際に遺跡を訪れたことがある割合は4割程度であることや、遺跡を訪れた理由の約3割が「別の目的地に近かった」というアンケート調査の結果から、今後は、情報の受発信や来訪者の属性・興味等に応じた誘客方策、地域への波及効果の拡大などといった、「文化財を中核とした観光まちづくり」⁵の視点をとり入れていくことが必要と考えられます。

そのためには、個々の遺跡からの発信だけではなく、縄文世界遺産をはじめとした道内の縄文遺跡全体が持つ強みや魅力をひとつのストーリーとして構築すること、また、構築したストーリーのもと、各地域（遺跡）ならではのサブストーリーの追加やストーリーを追体験出来るコンテンツの制作、実施などを通じて、遺跡の保存と活用による好循環を生み出す仕組みをつくることが重要です。

それらにより、「文化財を中核とした観光まちづくり」が、地域の持続的発展につながるという共感の輪を広げ、継続的、自立的に運営できる体制を広域レベルで構築していくことが理想的なあり方と考えます。

5 文化財を中核とした観光まちづくりについては、文化庁が平成28年度にとりまとめた「文化財を中核とした観光拠点形成による経済活性化調査研究」の考え方を参考としており、以下に抜粋要約します。

■文化財は、地域が永きにわたり大切にしてきた歴史的資源であり、地域の歴史や風土の固有性が凝縮された地域のアイデンティティそのものであり、地域振興の中心的な役割を担うインパクトを持つものである。一方の「観光」は、経済面のみならず、人と人の交流を生んだり、歴史や文化の教育的な場になったりするなど、地域振興に対して多面的な効果がある。

■観光まちづくりにおいては、「地域環境」、「地域社会」、「地域経済」の三つの要素がある。観光はこの三つのうち「地域環境」を保護・活用しながら「地域経済」に働きかける行為になるが、「地域環境」としての文化財が「地域社会」に大切に保存される動きと、観光がアンバランスになると、地域は破綻してしまう。

■これまで対立構造であると捉えられてきた「文化財」と「観光」を、ともに「まちづくり」を目指すものとして有機的に結びつけ、文化財の保存と活用の均衡を図りながら文化財が地域社会・経済にまで深く貢献し、その成果が地域にも文化財にも適切に還元されるような好循環の実現を目指すことに理念がある。

第4章 北海道がめざすもの

1 将来像

遺跡でつながる新たな価値創造空間、北海道

縄文時代の人々は、一万年以上もの長い年月のなか、環境変化に巧みに適応しながら、狩猟・漁労・採集を基盤に自然と向きあい、持続可能なライフスタイルを実現しました。また、本州が稲作を基盤とした弥生文化に移行した後も、北海道に暮らした人々は縄文的な暮らしを守り続けました。

近年、地球環境を保全し、多様性と包摂性のある国際社会の実現に向けた取組が広がるなか、厳しくも豊かな北海道の自然のなかで育まれた「北海道の縄文」の価値に光を当て、その価値を「ストーリー」として紡ぎ、訪れる多くの人々に共感や感動を与えられるよう資源として磨きあげることで、新たな「価値」を創造し、地域に交流と賑わいを創出していくことをめざします。

[将来像の実現イメージ]

■価値の保全

「北海道の縄文」の価値が広く道民に浸透し、縄文時代の人々が暮らした遺跡は、地域の誇りやアイデンティティとして認識され、遺跡周辺の豊かな自然環境とともに、コミュニティ全体で大切に守られています。

■価値の継承

遺跡には、地域の学校はもとより、道内、国内から教育旅行で訪れている多くの子どもたちの姿が見られます。子どもたちは、地域住民が中心となったガイドによる解説を興味深く聴き、スタッフも生き生きとしています。

■価値の普及

「こんなに寒い地域で、どのように生活していたのだろうか？」などといった誰もが感じる疑問に答えてくれる、豊富な知識をもったガイドによるツアーや、当時の自然環境や人々の生活を楽しく追体験出来るプログラムが好評です。

■価値の共有

「北海道の縄文」は、世界遺産登録後、これまで以上にその関心が高まり、遺跡の価値が改めて認識・共有されるとともに、地元食材を活かした「食」や地域の特色を組み合わせた様々なサービスも充実するなど、遺跡周辺地域は、国内外から来訪する人々で賑わっています。

■創造と発展

来訪者に向けた様々なサービスは、地域に新しい生業を生み出し始めており、こうした取組は、地域の人々により主導され、行政との連携のもと遺跡の保存と活用が相乗効果を生み出す好循環の仕組みが構築されています。

2 キャッチフレーズ

未来へつづく、一万年ストーリー。

「北海道の縄文」の活用を進め、将来像を実現するためには、何よりも地域住民や遺跡を訪れる人々に価値や魅力を伝え、取組への参加や来訪者からの発信を増やし、大きなうねりとしていくことが必要です。

そのため、「北海道の縄文」の魅力を誰もが理解でき、さらに、惹きつけるコトバとして上記キャッチフレーズを設定し、道民はもとより国内外の多くの人々に向けた発信の場面で常に使用することとします。

なお、取組に応じて下記のフレーズ等とも組み合わせて発信します。

Wow! 知れば知るほど、ディープ・・・

私たちの原点。縄文人の奇跡。

解くのは、あなただ。縄文ミステリー。

ちょっとステキかも。
縄文ライフスタイル。

私たちの300代前の祖先に会おう。

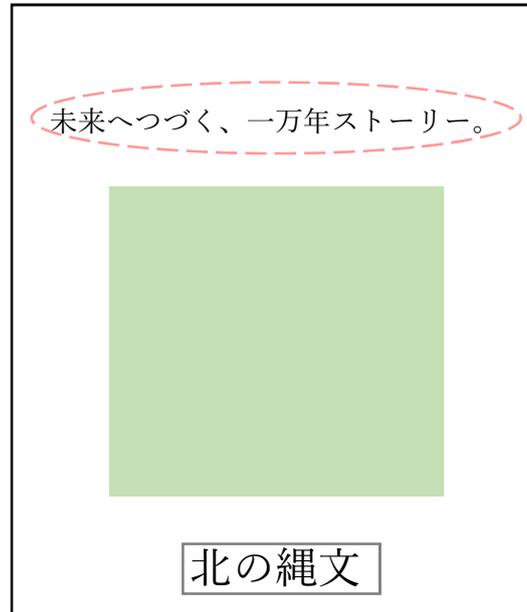
なぜ、こんなにも世界が驚いたのか？

北海道の、ロングロングヒストリー。

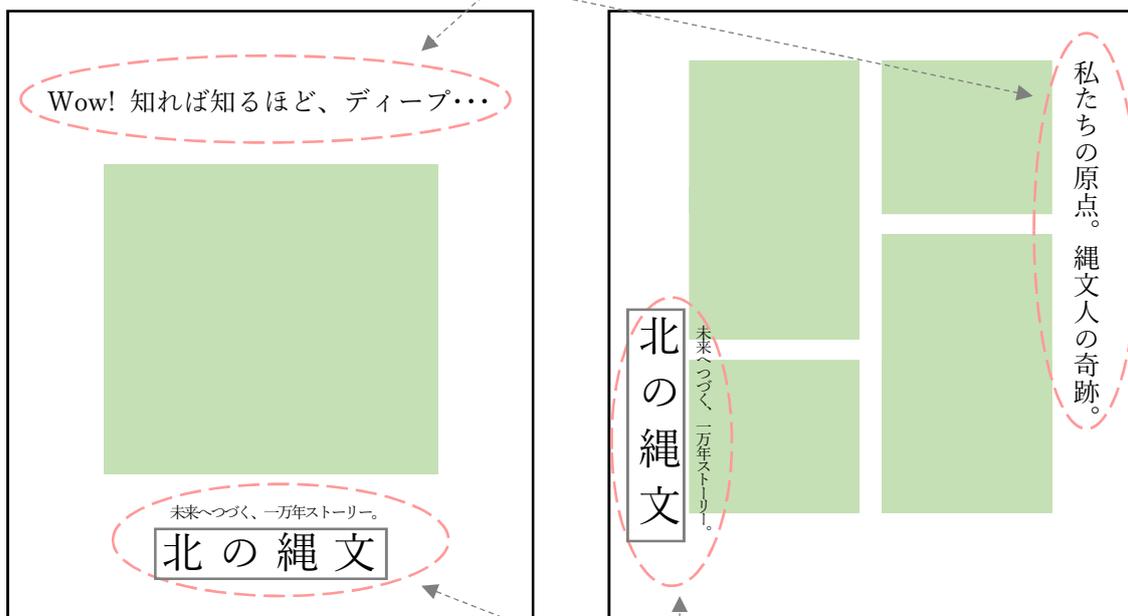
発見。未来社会へのカギ。

[キャッチフレーズの使用イメージ]（例：ポスター）

- ① 展開の初期は「未来へつづく、一万年ストーリー。」をメインで使用。



- ② 取組に応じて、その他のフレーズとも組み合わせて使用していく。



- ③ 「北海道の縄文」であることがわかる ロゴ（北の縄文など）と必ずセットで使用する。

3 各主体の役割と基本的な姿勢

将来像の実現には、これまで「北海道の縄文」を守り、その価値を継承してきた地域の人々をはじめ、行政や民間事業者など多様な主体が、めざすべき方向性を共有し、それぞれの役割を補完しあうことによって取組を進めていくことが重要となります。また、北海道全体で一体感のある取組を展開するためには、以下の3つの基本姿勢を共有しながら進めていくことが大切です。

【各主体に期待される役割（機能）】

- 北海道 北海道全体の取組を一体的に進めるための総合的な戦略のもと、普及啓発や情報発信を行うとともに、地域の取組が円滑に進むよう連携の場を構築し、将来的に「北海道の縄文」を活かした取組の中核を担う組織（以下、「中核組織」という。）の育成やサポートを行います。
- 市町村 各遺跡の保存活用を地域住民や地域の活動団体、民間事業者等と連携して進めます。
- 地域住民・道及び市町村と連携した保存活用に取り組むことや、新たな価値を創造
地域の活動団体 していく担い手となることが期待されます。
- 民間事業者 自らの得意分野等において各主体と連携し、遺跡の保存活用や新たな価値を創造する取組への参画が期待されます。

【3つの基本姿勢】

〔基本姿勢1〕 地域が主体

これまで「北海道の縄文」を守ってきた「地域の人」が主役となり、コミュニティを再生することで、自らが賑わいの創出に携わることが大切です。

〔基本姿勢2〕 来訪者視点の意識

「北海道の縄文」の価値を「正しく」伝えることはもとより、来訪者に感動と共感を伝えられる取組であるかを意識することが大切です。

〔基本姿勢3〕 持続可能な仕組みづくり

「保存」と「活用」が相乗効果を生み出し、将来にわたり持続可能な取組となる仕組みづくりが大切です。

第5章 戦略と施策の展開

1 戦略の視点

北海道における世界遺産登録後の活用に向けては、これまでも構成資産所在市町による取組が中心となって進められており、それぞれの取組は「北海道の縄文」の活用のベースを担うものとして、極めて重要です。

一方で、世界遺産登録後は、将来像を実現し地域に交流と賑わいを創出していくため、北海道を訪れる人々に対し「北海道の縄文」の価値や魅力を一体的に伝えていくことが必要となります。

「北海道の縄文」を活かしたこれからの取組は、地域的な視点と広域的な視点という2つの視点の必要性を各主体が共有するとともに、統一的なマネジメントのもとで各々の状況や立場に応じて戦略的に進めていくこと（以下、それぞれ「地域戦略」、「広域戦略」という。）が重要となります。

2 戦略の進め方

地域戦略と広域戦略を、各主体がそれぞれの現状に応じて段階的に進めることも重要です。

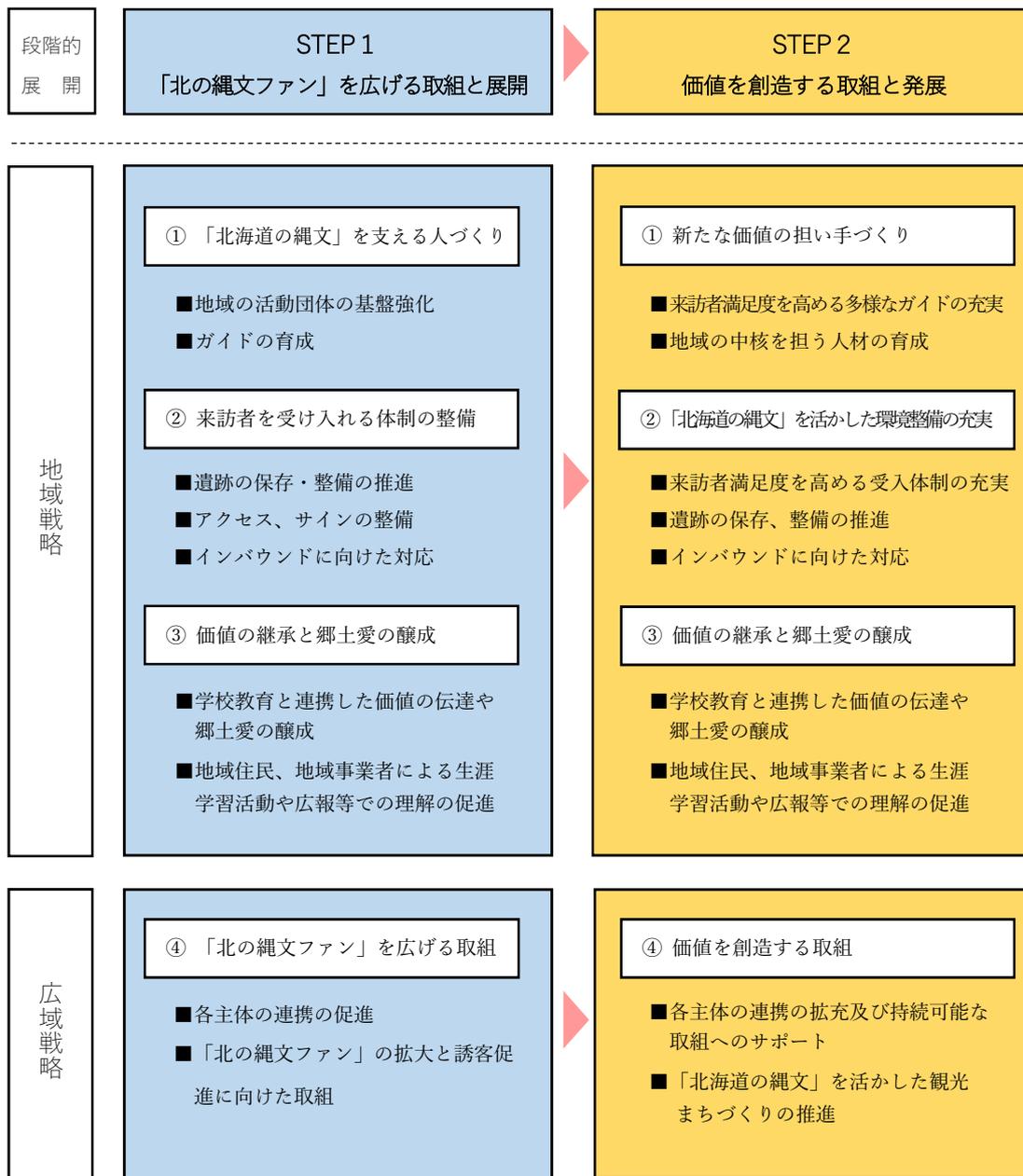
北海道が現在置かれている「地域の活動団体の活力低下」や「統一的な情報発信の不足」という課題を鑑み、基盤づくりや戦略の基礎となるストーリー構築を進める「STEP 1 『北の縄文ファン』を広げる取組と展開」から、STEP 1 の取組を充実・発展させた「STEP 2 価値を創造する取組と発展」へと段階的に展開していくことによって、将来像の実現をめざします。

なお、STEP 1 については概ね3年間を目標期間とし、取組の進捗に応じてSTEP 2 に移行し、その充実・発展的な取組の展開を図ることとします。



3 施策の展開

「戦略の視点」及び「戦略の進め方」に基づき、各STEPでの目標及び施策展開の方向性を示します。また、将来像の実現に向け各主体がそれぞれの役割や状況に応じて取組を進めていくための施策を取組例として示します。



（1）STEP1 「北の縄文ファン」を広げる取組と展開

【目標】

各主体の連携のもと、「北海道の縄文」の価値や魅力を「北の縄文ストーリー」として構築し、「北の縄文ファン」の拡大を図ります。また、「北海道の縄文」の価値に道民の気付きを起し、将来的に地域が主体となった取組につなげる基盤を築くことをめざします。

[地域戦略]

① 「北海道の縄文」を支える人づくり

将来像の実現のためには何より遺跡を守り、価値や魅力を伝えていく“人”が大切です。これまで行政とともに、地域の遺跡を守り、その価値の継承に取り組んで来た地域の活動団体をサポートするとともに、世界遺産登録により増加が予想される来訪者に、「北海道の縄文」の価値や魅力を伝えるガイドの育成が喫緊の課題です。

■地域の活動団体の基盤強化

（主な取組例）

- ◇学校教育と連携し子どもの頃から縄文遺跡に触れる活動を通して、団体の将来を担う人材を確保
- ◇団体間の交流・連携を促進する情報交換会等の開催（現地での開催だけでなく、ICT技術を活用した形式での開催などについても検討）
- ◇地域で活動する異分野の団体との連携など、団体の活動を広くアピールする取組の実施
- ◇イベント風景など、遺跡での取組に携わる「人」を中心とした動画の作成及び動画を活用した地域住民、事業者に向けた広報

■ガイドの育成

（主な取組例）

- ◇各地域でのガイド育成に向けた研修会の開催及び開催に向けたサポート
- ◇ターゲットに応じたガイドレベルの調整（世界遺産の価値の伝達や遺跡の特徴などを語る総合的ガイド、遺跡やその周辺の地域の魅力も併せて語る地域ガイド、など）
- ◇アドベンチャートラベルなど、海外からの来訪者に対応出来るプロガイドの育成に向けた検討
- ◇道内共通ガイドブックの作成や活用

② 来訪者を受け入れる体制の整備

世界遺産としての顕著な普遍的価値を次代へ継承するとともに、世界遺産登録を契機に増加が予想される国内外からの来訪者を適切に受け入れるための体制の整備が必要です。また、地域住民等の参加により遺跡周辺の環境保全を図っていくことも重要となります。

■遺跡の保存・整備の推進

（主な取組例）

- ◇「北海道・北東北の縄文遺跡群包括的保存管理計画」や各遺跡の保存活用計画等に基づく、適切な保存と管理
- ◇地域の活動団体等と連携した遺跡保護の活動
- ◇各遺跡の整備計画等に基づく、ガイダンス施設の整備や展示内容の充実
- ◇各主体が連携した遺跡周辺の環境保全の推進

■アクセス、サインの整備

（主な取組例）

- ◇移動手段に応じた経路情報など道内各遺跡へのアクセス情報を一体的に発信
- ◇自家用車やレンタカーなど、個人旅行に対応した遺跡までの確実な誘導を図るサインの充実
- ◇来訪者増加に対応する駐車場の確保及び駐車可能台数等の情報発信
- ◇自家用車以外の来訪を促す二次交通（タクシー、コミュニティバスなど）の充実
- ◇GPSやAR（拡張現実）技術等を活用した遺跡への来訪促進

■インバウンドに向けた対応

（主な取組例）

- ◇多言語に対応した統一的なホームページの整備
- ◇道内通訳案内士との連携や通訳案内士に向けた講習会等の実施
- ◇各遺跡やガイダンス施設等での多言語対応ガイドツール等の導入検討
- ◇二次元コードを活用した多言語解説への対応
- ◇ポストコロナを視野に入れた施設ごとの対応（消毒液、マスク等）はもとより、新たなインタープリテーションのあり方などを検討

③ 価値の継承と郷土愛の醸成

「北海道の縄文」の価値が親から子へ世代を越えて伝えられ、遺跡が地域に対する誇りや愛着を深める存在となることで、地域の人々が将来的な保存と活用の担い手となるよう、教育現場や地域の人々に向けた普及啓発が重要です。

また、こうした価値の継承を通じ、地域環境の保全や脱炭素社会に向けた環境

保全に関する意識の高揚を図ることも重要です。

■学校教育と連携した価値の伝達や郷土愛の醸成

（主な取組例）

- ◇小中学校に向けた「北海道の縄文」の学習参考教材の作成、配付
- ◇夏休み等を活用した子どもたちによる遺跡ガイド活動の実施
- ◇教職員に対する価値の伝達
- ◇教育旅行の誘致に向けた取組

■地域住民、地域事業者による生涯学習活動や広報等での理解の促進

（主な取組例）

- ◇「北海道の縄文」の価値や魅力をわかりやすいストーリーで伝える啓発物の作成、啓発
- ◇他の世界遺産における地域の取組事例の紹介などによる理解の促進
- ◇イベント風景など、遺跡での取組に携わる「人」を中心とした動画の作成及び動画を活用した地域住民、事業者に向けた広報（①の再掲）
- ◇縄文文化の学びと連動した、生涯学習活動の促進

[広域戦略]

④ 「北の縄文ファン」を広げる取組

「北海道の縄文」の価値や魅力を、道民はもとより来訪者を惹きつけるストーリーとして構築し、地域の特色やターゲットに応じた戦略的な展開を進めることで、「北の縄文ファン」を広げることをめざします。

■各主体の連携の促進

（主な取組例）

- ◇各主体が連携する場（プラットフォームなど）の設置
- ◇統一的な情報発信
- ◇「縄文のまち連絡会」⁶と連携した道内縄文遺跡を活かす取組の検討
- ◇将来的な中核組織のあり方（地域連携 DMO など）の検討

■「北の縄文ファン」の拡大と誘客促進に向けた取組

（主な取組例）

- ◇来訪者を惹きつける「北海道の縄文」ならではのストーリーの構築
- ◇ストーリー及びキャッチフレーズ等を活かした「北海道の縄文」の価値・魅力の発信
- ◇道内外からの教育旅行の誘致による将来的なリピーター層への浸透
- ◇アドベンチャートラベル推進に向けた取組との連携

⁶ 「全道の縄文遺跡のあるまちが集い、共に協力しながら縄文に学び、縄文の知恵を活かしたまちづくり策を探る」ことを目的に、2010（平成22）年に設立。現在28市町が加盟（2020（令和2）年10月時点）。

（2）STEP 2 価値を創造する取組と発展

【目標】

STEP1の基本施策を充実・発展するとともに、広域戦略として地域住民が「北海道の縄文」の価値や魅力を活かし、地域コミュニティの再生や新たな生業を生み出すなど、地域に交流と賑わいを創出していくことをめざします。

[地域戦略]

① 新たな価値の担い手づくり

来訪者が縄文文化や遺跡だけでなく、遺跡のある地域のファンとなっただけくよう、来訪者の興味やニーズ（時間や見たいもの、体験したいものなど）に合わせた対応が出来る多様なガイドの充実をめざすことが重要です。

また、縄文遺跡を活かした取組を地域の人自身が積極的に参加し、地域の新しい価値を担っていくことが必要です。

■来訪者満足度を高める多様なガイドの充実

（主な取組例）

- ◇アドベンチャートラベルの来訪者に対応出来る専門的ガイド（縄文文化以外の自然環境や地域の多様な観光資源等にも精通）の充実
- ◇まち歩きガイドなど、地域の魅力を伝えることの出来るガイドの充実

■地域の中核を担う人材の育成

（主な取組例）

- ◇地域の人自らが地域の縄文遺跡を活用した取組の担い手となるよう、地域での自主的な研修会の開催等をサポート

② 「北海道の縄文」を活かした環境整備の充実

「北の縄文ファン」となった人々の地域への滞在を増やし、来訪の満足度を高めるため、先端技術の活用による案内の充実や楽しみながら縄文文化を知り、体験できる環境の整備をめざすことが重要です。

■来訪者満足度を高める受入体制の充実

（主な取組例）

- ◇先端技術の活用やコンテンツ作成（遺跡でのプロジェクションマッピングや三次元計測による出土品等の三次元モデル化やレプリカの製作など
- ◇景観に配慮したサインの整備、充実
- ◇調査研究、情報発信の拠点の形成
- ◇滞在時間の充実を図る体験プログラムの充実

■遺跡の保存・整備の推進（STEP1の継続）

（主な取組例）

- ◇「北海道・北東北の縄文遺跡群包括的保存管理計画」や各遺跡の保存活用計画等に基づく、適切な保存と管理
- ◇地域の活動団体等と連携した遺跡保護の活動
- ◇各遺跡の整備計画等に基づく、ガイダンス施設の整備や展示内容の充実
- ◇各主体が連携した遺跡周辺の環境保全の推進

■インバウンドに向けた対応（STEP1の継続）

（主な取組例）

- ◇多言語に対応した統一的なホームページの整備
- ◇道内通訳案内士との連携や通訳案内士に向けた講習会等の実施
- ◇各遺跡やガイダンス施設等での多言語対応ガイドツール等の導入検討
- ◇二次元コードを活用した多言語解説への対応
- ◇ポストコロナを視野に入れた施設ごとの対応（消毒液、マスク等）はもとより、新たなインタープリテーションのあり方などを検討

③ 価値の継承と郷土愛の醸成

STEP 1の取組を継続し、保存と活用の担い手として地域の人々の参画を促すため、学校現場や地域の人々に向けた普及啓発を行うことが必要です。

学校教育との連携を深めるため、現場の教師が活用しやすいコンテンツの作成等を進めるとともに、地域の住民や事業者が縄文を活かした取組に関わる機会を増やしていくことが欠かせません。

■学校教育と連携した価値の伝達や郷土愛の醸成

（主な取組例）

- ◇教育現場で普及が進むタブレット端末等で活用出来るコンテンツの作成
- ◇小中学校に向けた「北海道の縄文」の学習参考教材の作成、配付(STEP1の継続)
- ◇夏休み等を活用した子どもたちによる遺跡ガイド活動の実施(STEP1の継続)
- ◇教職員に対する価値の伝達(STEP1の継続)

■地域住民、地域事業者による生涯学習活動や広報等での理解の促進（STEP1 の継続）

（主な取組例）

- ◇「北海道の縄文」の価値や魅力をわかりやすいストーリーで伝える啓発物の作成、啓発
- ◇他の世界遺産における地域の取組事例の紹介などによる理解の促進
- ◇イベント風景など、遺跡での取組に携わる「人」を中心とした動画の作成及び動画を活用した地域住民、事業者に向けた広報
- ◇縄文文化の学びと連動した、生涯学習活動の促進

[広域戦略]

④ 価値を創造する取組

STEP 1 の取組により「北の縄文ファン」が拡大し、地域への来訪者の増加や滞在時間が延びることで、地域への関心の高まりが期待されます。これらの人々に地域のファンになっていただくとともに、地域の人自身が「北海道の縄文」を活かした取組の中核を担い、新たな価値として創造し、地域の賑わいの創出につなげていくことをめざします。

■各主体の連携の拡充及び持続可能な取組へのサポート

（主な取組例）

- ◇観光等他分野の組織等との連携促進
- ◇中核組織による取組へのサポート

■「北海道の縄文」を活かした観光まちづくりの推進

（主な取組例）

- ◇観光事業者等との連携の強化
- ◇地域の多様な資源と連携した周遊コンテンツの開発
- ◇地域の中核を担う人材の育成（地域戦略①との連携）
- ◇地域資源を活かした国際会議等の誘致
- ◇自然と共生する持続可能な縄文ライフスタイルを活かした新たな誘客

4 工程



第6章 将来像の実現に向けて

将来像の実現に向け、各主体がそれぞれの役割に応じて、また、相互に連携して取組を進めることが重要である一方、これらの取組を持続的に推進していく体制の構築も必要です。

1 各主体の連携と推進体制のあり方

体制の構築については段階的に進めることが必要であり、STEP 1では、各主体が参画する連携の場（プラットフォームなど）を構築し、具体的な取組内容の企画・実施を推進します。

将来的には、中核組織が、行政をはじめとした各主体のサポートのもと、事業内容の充実や人材の育成、マーケティングに基づく情報受発信や滞在プログラムの提供など、「北海道の縄文」を活かした観光まちづくりを一体的に担っていくことが望まれます。

2 中核となる人材のあり方

持続可能な体制を構築していくにあたり、最も重要な位置を占めるのは、組織を導く中核的な人材の存在です。各主体と円滑に連携することはもとより、地域が守り継承してきた縄文遺跡の価値や支えてきた人々の想いを大切にし、将来にわたって「北海道の縄文」を活かした取組を地域とともに持続的に進めていくという想いを持った人材が担い手となることが重要です。

3 持続可能な運営のあり方

持続可能な取組のためには、推進体制や人材だけでなく運営資金を確保する仕組みも重要となります。

特に、来訪者の満足度を高め、保存と活用の双方が相乗効果を生み出していくためには、持続可能な運営の仕組みを確立することが重要であり、体験型ふるさと納税等の行政からの資金や地域活性化ファンド等からの投資、コンセッション方式の導入など多様な資金調達や運営手法について検討していく必要があります。

発 行

令和 3（2021）年 3 月

環境生活部文化局文化振興課

縄文世界遺産推進室